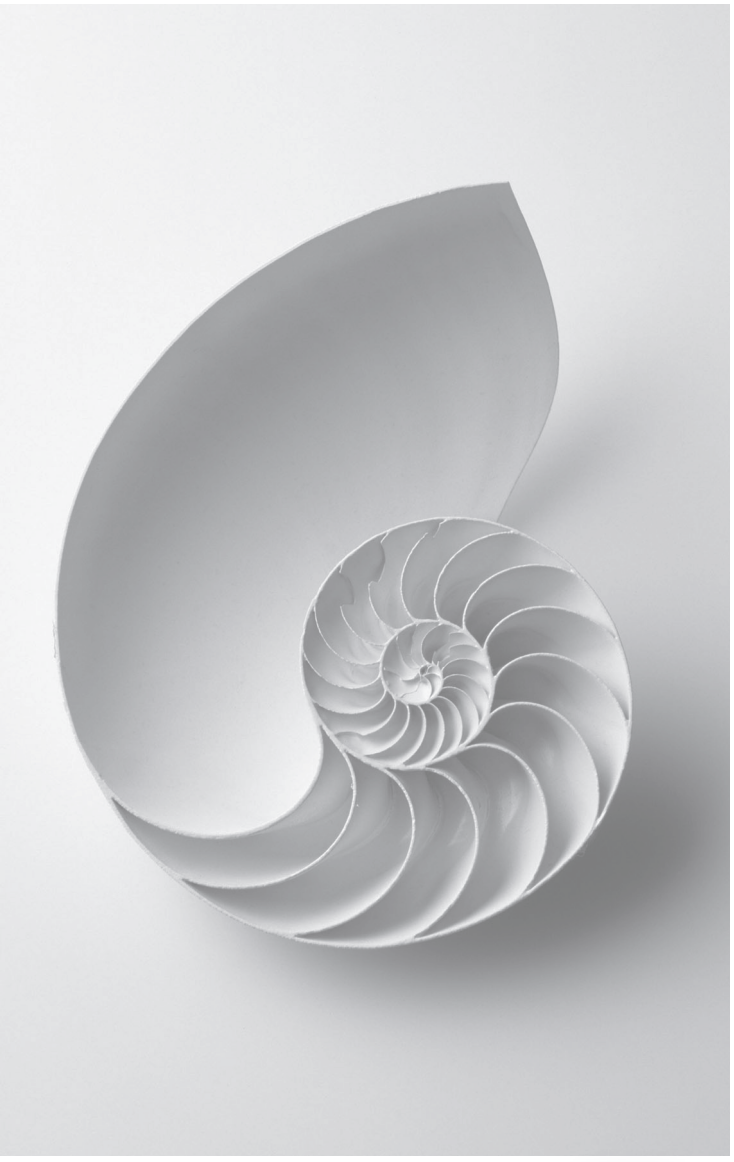
第20回

文窓賞優秀作品集



2026年10月発行

文窓会

神戸大学文学部同窓会

第 20 回　文窓賞
学生レポートコンクール 入賞作品

優秀賞

「海の見える坂で」

光野　麦穂（英米文学 4回生）

佳　作

「教養でつながる」

清水　さやか（フランス文学 4回生）

新人賞

「文学を、学ぶ」

工藤　陸（1 回生）

新人賞

「会話の先にあるまだ見ぬ世界」

藤原　帆夏（1 回生）

◎ **選考会**　2026年8月6日

◎ **応募総数**　9作品

◎ **選考委員**

白鳥義彦　研究科長（社会学　教授）

中畑寛之　副研究科長（ヨーロッパ文学　教授）

古市　晃　副研究科長（日本史学　教授）

武藤美也子　吉田浩次　廣野幸夫　三宅征彦　中川伸子　市澤　哲

谷上光晴　津田　薫　梅村麦生　成田千紘　西川京子（選考委員長）

なお、レポートコンテスト受賞作品が決定し、
同窓誌「文窓」に受賞作品講評が掲載された後に受賞辞退の申し出がありました。
最終的な受賞作品は上記のとおりです。

第 19 回文窓賞優秀作品集のお名前に間違いがありました。
訂正してお詫び申し上げます。

【誤】 有川　悠馬　→　【正】 有川　悠真

優秀賞

海の見える坂で

光野　麦穂（英米文学専修 4 回生）

文学部からの帰り道、山と海を見渡せる急な下り坂、私はよく考え事に費やす。

山は良い。私がちっぽけな存在だと教えてくれるから。海は良い。私はどこまででも行けることを思い出させてくれるから。今になってはありふれたこの景色に、関東の田舎からはるばるやってきた高校生の私はなんだか惹きつけられて、この街に住みたいと思うようになった。

来年から私は関東に戻ることなく、この土地で働く。母と別れ、この街でひとりで暮らしていくと決心した時には想像もしなかった未来だ。

昔からやりたいことが選べない性格だった。父に「やりたいことが全部できるわけじゃないんだから取捨選択をしろ。」と怒られた日を思い出す。たしか何個かやっていた習い事の行事が被って決められず、泣いていたんだと思う。結局なにを選んだのかさっぱり覚えていないのだが。

しかし大学に入ってからはできることの選択肢が増え、優柔不断さに拍車がかかったように感じていた。1 回生から続けてきた学生活動を引っ張っていきたい。専修の仲間と一緒に授業を受け続けたい。留学にも行ってみたい。今やりたいことと留学を天秤にかけ､悩んでいる時､手放したくないと思う場所があまりにたくさんあったことに気が付いた。知らない街だった神戸がちゃんと私の居場所になっていた。だからこそ、離れるのが怖かった。

それでも結局私は留学に行った。イタリアへ行った。でも正確に言えば､「行く」と決めたわけではない。本当に決められなかった私は､締め切り直前に半年間の交換留学に申請を出した。そして、英語資格で良いスコアを取れたら応募しよう、及第点を取れたら、もし交換留学の面接に通過できたら留学しよう、と最後まで決断を先延ばしにし続けた。結局自分では何も決められていないのだ。ただ､「やらない後悔よりやった後悔」という言葉が好きだし、挑戦してみたかった。どんな結果が待っていようとも、自分から機会を手放して後悔する方が怖かった。そうやって生きてきたし、だめだったことは縁がなかったのだと悔しい気持ちをそっと脇に置いてきたと振り返って思う。

そうして私は飛行機に乗り、イタリアに降り立った。たった半年だったけれど、人生で最も幸福な瞬間は今だと何回も思った。特にひとりで国々を旅して、死ぬまでに来られると思ってなかった街を歩いている時はちょっと涙が出そうだった。夢みたいだと思った。イタリアという国が大好きになったし、好きなものが少しずつ塗り替えられていった。思ったことを納得のいく言葉でノートに書き留めることができたし、気に入った景色を好きな色で描くことができた。大切な人にはハグをして、再び会えたことを喜んだ。今思うと、一瞬で日本に帰ってきたように感じるけれど、すべての出来事が隙間

から逃げていかないように、ひとつずつ握りしめていくような日々だった。

大学生になってから初めての「立ち止まる時間」だったのだと振り返って思う。日本では授業へ行き、アルバイトをして、サークルへ向かい、毎日締め切りに追われる。考える前に一日が終わってしまうような淡々とこなす日常とは比べ物にならないくらいの鮮やかな半年だった。

イタリアの生活に慣れてきた証拠だろうか。留学先での生活が幸せすぎて、終わりを予感してしまっているからだろうか。留学開始から2か月が過ぎた頃、不意に「就活」という二文字が頭をよぎった。私は2月になれば日本に帰らないといけないのだ。就活が私を日本に帰らせる。そのことが、とても怖くて嫌だった。正直に言うと私は働きたくなかった。本を読んで、旅をして、考えたことをノートに書き留める。そんな生活を終わらせたくなかった。そして大学で文学を学ぶ時間は、私の人生でずっとやりたかったことだった。社会人になることは、それらを手放すことのように思えたのだ。

それでも就活は始まる。自分が何者なのか、何者かになれるのか。エントリーシートを書くたび、アイデンティティがぐらぐら揺れた。特に将来なりたい職業はなかったので、私は自分が好きなものやことを理由に業界選びをしていた。その最たる例が出版業界だ。まだ本を追っていたかった。理由はそれだけである。あの文系版トライアスロンのような多種多様なエントリーシートの質問に応えようと、過去を振り返るうちに自分をぽつぽつと見つけられた。私は留学に来たということもあり、どちらかと言えば自分のことを分かっているし、行動力はあるし、強い人間だと思ってしまっていた。でも自分のありのままで答えようとすればするほどに、ちっぽけでつまらなくて弱っちい人間だと自覚できた。エントリーシートのおかげで、自分の知らない自分に気づけるだなんて、その事実もちっぽけな証拠に思えた。

何にでもなれる、今なら私の人生を自分で決められる。

逆に今頑張らなかったら、どうなるのだろう。私の指の隙間から可能性がぽろぽろこぼれ落ちていくように見えた。

私に経営の知識があったらとか、はたまたプログラミングのスキルがあったらなどと愚かにも思った。エントリーシートに大学での研究内容を書く時はなんだか嫌な気分になる。4年間ただ本を読んでいるだけのように見えるし、この作品は文学部ならだれもが知っているはずなのに、もしかしたら知らないかもしれない。タイトルを知っていたとしても面白さなんて考えたことあるのかな。

文学部が有利な業界なんて別にない。この学部に属しながら自分が社会でやりたいことを見つけるのは本当に難しかった。でも文学部の良いところは、無限大の可能性があることだ。そして、無限大の選択肢を選び取るための思考を助ける、表現力が身につけられるところだ。「私は何が好きなんだろう。」、「私は何を大切にしたいんだろう。」その問いを何度も何度も繰り返した。

ある時聞いた出版社の社員の方の言葉が、忘れられず頭に残っている。

「百聞は一見にしかずって言葉あるじゃないですか。私それは真実だと思うんですよ。その言葉に沿って考えると出版社が武器としている媒体は、どちらかと言えば百文のほうになるじゃないですか。だからといって劣るわけではないと思うんです。百文があったからこそ、一見は輝いてくるわけで 百文の過程で身に付けた知識とか膨らませた想像とか、そういうのが

感動を読むと思うんですよね。一見してみようって思うような百聞をいや、百億聞を作りたいなと思います。」

その瞬間、留学中に見た景色が頭に浮かんだ。私の留学生活のいくつもの一見が輝いたのは、間違いなく高校・大学での勉強があったからだった。新しい場所を訪れるたび、狭い教室の小さな机に顔を近づけて、地図帳をなぞっていた高校生の私が飛び跳ねて喜んでいた。文学部で過ごした時間は、出会う人たちとの会話を豊かにしてくれていた。

この時から、出版社の方のように百聞を届けて、新しい世界に出会うきっかけを作り、だれかの日常の景色を鮮やかにできる仕事をしたいと考えるようになった。

留学生活の終わりがちらつき始めた頃、ずっと行きたかったナポリを訪れた。ナポリの夜の海は黒く深く、その波の上で堤防沿いの街灯の光が、ゆらゆらと月の方へ向かっていた。1人海沿いの石畳を歩いたあの日、やっぱりまだ大学で勉強を続けたくて、あと1年で卒業することを後悔して、胸のあたりがひりひりとした。明るく暖かい街の、暗く静かな夜。ひとりきり。やっぱりセンチメンタルになっていた。もっと文学を学んでいたい。もっと旅をしていたい。働くことが嫌だったのではない。考えることをやめる人生が嫌だったのかもしれない。私は初めて気づいた。

留学は私に心行くまで考える時間をくれた。大学生になって、自由に使える時間はうんと増えたはずなのに、時間が過ぎるのがどんどん早くなっていくように感じていた。色んな可能性の中から、どれかを選ぶこと、つまりそれ以外の可能性を捨てることがいつだって苦手な私にとって、時間をかけて自分を振り返ることは、選択する上での自信につながった。今までやってきたこと、好きなこと、その時思っていたことをひとつずつ結んでいきながら、私はゆっくりと将来を考え始めた。いつも何かを選ぶ時はできるだけどちらの可能性もつぶさないように気をつけてきたけれど、その選択にだって私らしさがあると思えるようになった。

留学から帰って、半年ぶりの自分の部屋にもすっかり違和感がなくなった頃、「ここで働きたい」と思える会社に出会えた。現在の無限にある本や知識を追いかける生活とがらりと変わってしまうことはまだ寂しかったけど、それでもその会社でできることにすごくわくわくした。ほかの会社にはなかなかエントリーしようと思えず、「もしここに落ちたらどうしよう」と考えていたほどだ。就職先を選ぶときも、きっと私はいつものようにうだうだと迷うのだろうと思っていた。だからこそ、こんなにも迷わず「ここだ」と思えたことが、自分でも不思議だった。

今も私は、この坂を歩く。山と海はいつだって変わらず目の前にある。

これから先も何度も選択に迷うのだろう。でも、もう大丈夫だ。これまでだって、考えることを諦めず、悩みながらも一歩ずつ前に進み、自分なりの答えを見つけてきたことに気づくことができた。たとえ今よりずっと本が読めなくなってしまっても、私が考えてきたことや文学部で出会った言葉は、ずっと私の中に居続けてくれる。

いつでも「頑張ろう」と思わせてくれたこの景色が、最近は少し違って見える。来年から、かつての私が憧れた景色を支え、守り、この先もずっと続いていくための仕事に就くことを嬉しく思う。

佳　作

教養でつながる

清水（しみず）　さやか（フランス文学専修 4 回生）

私が大学 1 年生で書いた初めての文窓賞のエッセイのタイトルは、『教養人の孤独』だった。改めて読み返すと、「何かを知るということは、知らなかった時の世界を捨てるということであり、誰も知らない何かを知るということは、孤独になるということだ。」などと書いてある。当時のエッセイでは、それでも学び続けることによって知識を身に着け、同じように教養のある人々と「共に読んだり話したり書いたりするなかで知識を共有し、実存的交わりを得て、豊かな大学生活を送りたいと思う。」と結んでいた。大学生としての 4 年間が終わろうとしている今、果たして私の大学生活は豊かだったのだろうか。教養があるということが、誰も知らない何かを知るということが、本当に良いことだったのだろうか。この問いに対する答えを、私の神戸大学での 4 年間の振り返りとしたい。

私の大学生活を一言で表すのであれば「お酒とクラシック音楽とフランス文学」であろう。神戸大学交響楽団でヴァイオリンを演奏しながら部活の先輩と一緒にビールを飲み、フランス文学専修でフランス文学を学びながらワインを飲む日々。オックスフォード夏季プログラムで訪れたイギリスのパブで初めてお酒に口をつけた日から、色んな人と色んなものを食べたり飲んだりしてきた 4 年間だった。長時間お酒を飲みながら会話を続けるためには、話題が必要だ。バックグラウンドの異なる他者が一同に会するお酒の席で、共通の話題として音楽や文学作品があったからこそ生まれた会話があり、連帯感があった。私は大学 3 年次にフランス留学を経験したが、留学先で出会う人々もまた異なるバックグラウンドを持っていた。コミュニケーションをとるにあたって前提となる文化や言語さえ違う状況で、フランス語もおぼつかない私がなんとか会話を試みるとき、そのきっかけとして教養があった。現地で入ったオーケストラの仲間たちとはクラシック音楽の話や音楽家の話をすることによって仲良くなることができた。私と同様に留学生としてフランスに来ていた友人たちとはマンガや、文学作品を通じて交流した。一緒に同じ音楽を演奏したり、美術館やアニメのグッズショップに出向いて互いの文化を紹介し合ったりする日々が、人種も国籍も異なる我々のつながりを深めた。中国人の友人と『嫦娥奔月』の観劇をしたときのことだ。この作品は中国の有名な神話伝説で、嫦娥という女が不死の薬を飲んで月にのぼっていく（月に奔る）物語であるが、日本にも竹取物語という似た物語があると伝えると話が盛り上がった。同じ作品を観劇し、フランス語で上演された劇について分析をしながらお互いに過去に読んできた物語の内容を共有することで、友好を深めることができたのだ。ひとつの音楽や物語を通じて国籍を超えたつながりが生まれる、まさに教養によって交流するような在り方が可能であると身をもって実感した留学生活だった。

« Chang'e et la lune » , mise en scène `par Emma Varichon et Sarah Zaher（ Nanterre sur Scène - Festival des Arts de la Scène ）上演 2025/11/26, 参照 2026/07/19

デジタル大辞泉「教養」（ 教養（キョウヨウ）とは？ 意味や使い方 - コトバンク ）参照 2026/07/19

もう少し別の角度からも教養の意義について考えよう。私の実家は宗教法人を経営している。宗教というものに対する社会からの眼差しというものは、必ずしも常には好意的ではない。だから私は色んな言葉を飲み込んで、色んな自分を演出して出自を注意深く隠してきた。同級生からの偏見に満ちた言葉を否定し切れない自分も、情報の出し方を相手によって調整している自分も、宗教的なアイデンティティを捨て切ることはできない自分も、全ていないことにしていたのだ。複雑で多面的で揺らぐ自己および自らの宗教に対する立場や考えを語り切ることはおそらく不可能であるし、それゆえに私は自らについて語りうる言葉を持たない。家族の話、職業の話、地元の話、お正月の過ごし方。そういった世間話は常に私にとっては恐怖の対象だった。他者の何気ない一言に人知れず傷つき、他者からの視線を常に気にしていた。あらゆる会話が出自につながりうる状況下で、クラスメイトの真似をして時には嘘をついたり、曖昧に微笑んで濁したり、ほとんど全ての世間話的な会話において戦略を立てて対処していた。そして自身のバックグラウンドを明かさなくても自らについて語ることができる、文化芸術に関係するような会話を好んでするようになった。その結果として文学部に進学したわけだが、今思うと私の学部選択は私が希望して選んだものというよりかは必然的なものだったのだろう。語りえぬものについて語るとき、あるいは何か核心に触れるような話題を注意深く避けるときに私は教養を用いるのだ。

ここで教養というものの定義に立ち返って考えてみる。大辞泉には、教養とは「1. 教え育てること。2. ㋐学問、幅広い知識、精神の修養などを通して得られる創造的活力や心の豊かさ、物事に対する理解力。また、その手段としての学問・芸術・宗教などの精神活動。㋑社会生活を営む上で必要な文化に関する広い知識。」とある。ここまで述べてきた教養は、2 の定義に近いものだったが、特に 2.㋑の定義について、「知識とスキルのセット」という視点から考えてみる。私は少なくない人数の大学生がそうするように、就職活動をした。様々な仕事に就く社会人の話を聞く中でいくつか耳に残った言葉があるのだが、その一つに「世界中どこでも使うことができる知識とスキルのセットを身につけることができる」というものがあったのだ。この視点から仕事を見てみると、この世界には実に多様な「知識とスキルのセット」があふれていることがわかる。フランス文学の研究をする仕事であればフランス文学の主要な作者や作品、関係のある歴史や思想についての知識と論文を書くスキルが求められるだろう。上に挙げた言葉を聞いたのはマーケティング系の職種だったが、マーケティングのような商品を売る仕事であればその商品に関する知識と消費者の動向を分析するスキルが求められるのだろう。つまるところ、自分がどんなことを大学で学びどんな職種に就くのかということは、自分がどんな知識とスキルのセットを現在身に着けていて、将来的にはどんな知識とスキルのセットが欲しいのかということだったのだ。私は現時点で、どんな知識とスキルのセットを持っているのだろうか？

似た問いとして、私は冒頭で「誰も知らない何かを知るということが、本当に良いことだったのだろうか。」と問うた。私がこの 4 年間で知ったもの、それはワインのコルク栓の開け方、

What Makes a Good Life? Lessons from the World's Longest Scientific Study of Happiness (What Makes a Good Life? Lessons from the Longest Study on Happiness | Robert Waldinger | TED) 投稿 2016/01/26, 参照 2026/07/16

ヴァイオリンの調弦の仕方、フランス語の発音の仕方といったものだ。フランスに留学経験がありクラシック音楽とワインが好き、などと言うと敬遠されてしまうこともある。お嬢様だと言われたり、違う世界の人だと言われたりするのだ。しかし私は思う、そこにあるのは持っている知識とスキルのセットの種類の差でしか無いのではないか、と。私と共に学びあるいは部分的に経験を共有した同期は多いが、私と全く同じ経験をした人間はいない。私の持つ知識とスキルのセットを完全に共有している人間はこの世界には存在しないし、逆に私もまた自身の友人が持つ知識とスキルのセットを完全には知り得ない。自分が生きてきた日々、見てきた景色､そのすべてが誰も知らない何かであり得る。知っていることが良いことなのかどうかという価値判断を下す以前の問題として、全ての人間が誰も知らない何かを知っているのだ。

ハーバード大学の研究によると、良好な人間関係が我々の人生の幸福度を上げるらしい。前述した教養の定義の１に「教え育てること」とあったが、先輩や先生方をはじめとした私の周囲の人間はまさにこの意味で教養のある人々だった。私の知らない、彼らが経験してきたことの共有によって私は教え育てられたからだ。私はこの４年間で自分が求めていた、あるいは求めていなかったが幸運にも得ることができた知識とスキルのセットを多く得た。「私の大学生活は豊かだったのだろうか」、と冒頭で問うたが、こうして振り返ると様々な人間との出会いを通じて良好な人間関係および知識とスキルのセットを得るという、豊かで幸福な大学生活だったと自信を持って答えることができる。

ここまで、大学生活を振り返りながら冒頭の問いに答えてきた。回答をまとめよう。私の大学生活は良好な人間関係および充実した知識とスキルのセットを得た、豊かなものだった。教養があるということによって、異なるバックグラウンドの他者と交流し仲良くなることができたため、私にとっては教養があることは良いことだった。ある人間が経験してきたことはその人しか知り得ないため、誰も知らない何かを知るということは、良いこととも悪いこととも言えない。しかし個人の経験は共有することによって他者を教え育てることができるものであり､私は大学で出会った他者から多くを学んだ。私は神戸大学で多くを学び、豊かな大学生活を送った。

大学生活も終わりに近づき、学生の身分を終えて社会に飛び込もうとしている今、職業選択に悩んだり他者との関わり方に悩んだりすることもある。しかし私が４年間かけて求め続け、意義を考え続けてきた教養というものが、きっとこの先の人生を豊かで幸福なものにしてくれる。他者と関わり、相手の持つ知識とスキルのセットを学び続けること。自らが求める知識とスキルのセットを他者に共有し、教え育てること。幅広い知識を得て、良好な人間関係を築くこと。他者と出会い、語り、共に読んだり話したり書いたりするなかで知識を共有すること。

誰も知り得ない何かを知り、共有する。

教養でつながる。

新人賞

文学を、学ぶ

工藤（くどう）　陸（りく）（文学部１回生）

僕は、二十二歳の大学一回生だ。というわけで、僕の同窓は大概が院生であるか、就職している。それは日本では珍しいことなのだと思う。何も、これまで何もせずにいたわけではなくて、別の大学でずっと工学の勉強をしていたのだ。それをふと辞めて、神戸大学文学部に来たのである。

では何を思って、元いた大学を中退したのちに文学部で学ぶことにしたのか。

その前に、僕にとって文学とは何であるか、小説とは何であるかを述べておきたい。僕にとっての文学には、二つの側面がある。一つは、自分以外の人間の生きる世界を知れるということ。まるで僕自身が小説の世界で、心を弾ませ、痛みを感じ、美しい光景に息を飲む、そのような心地。それは何事にも代えがたい喜びなのだ。時に現実の世界と交錯してゆく文学の世界は、――気持ちの良い風に吹かれて、ある小説の一節を思い浮かべるといった瑣末なことでいい――僕の生きる世界をも美しく鮮やかなものにしてくれる。

もう一つは、文学を体験することそのものが僕の人生において、僕の絶対に安心できる場をつくるということ。僕は小説や詩を読む時、完全に自らだけの世界に入り込むことができる。その間だけは、苦しみや痛みから離れられる。決して現実からの逃避ではなくて、ちょうど嵐の中の洞穴みたいに、ひと時の安息をもたらしてくれる、僕には文学とはそういうものなのだ。

他大学の工学部にいた頃、僕はかなり迷っていたようで、しかしそれは今振り返ってみてようやく気がついたことだ。当時、僕は周りの皆と同じように工学部を卒業し、院進し、そして企業で研究をするものと思っていた。というよりも、それが余りに当然なことのように思えて、他の未来など考えの中になかったのだ。

が、僕には迷いがあった。自分でも気付いていなかったけれど、僕はその完全に先の定まった未来に納得していなかった。その迷いに気が付いたのは母だった。

「ねぇ、今のあなたの目は輝いていないように見える」と、母は言い、

「このまま学び続ければ、きっと素晴らしい研究者になれる。それから、お給料もなかなかいいだろうし、生活は安定すると思う。でもね、それはあなたの本当にやりたいことじゃないんじゃないかしら」と、続けた。

僕はその時はじめて、自分のしたいことと自らの未来とを再考することになった。目の輝きについては、僕には分からなかったけれど、母が言うのだからそうだったのだろう。それにしても、僕は一体何がしたいんだろうか。

ひとまず、僕は大学を一年間休学することにした、一年あれば、僕は何がやりたいのかを見つけられるはずだ、という希望的観測のもと。両親は一切反対しなかった、寧ろ息子の選択を喜んでいるようだった。

そうして、地元に帰ってきて三ヶ月が経った。僕は毎日を特に何もすることなく過ごしていた。一体何がしたいんだろう、という問いを頭の片隅に常に感じながら一日一日を生きていた。僕は色々と選択肢を模索した。それは例えば、役者の道だったり（実際に僕は役者のオーディションに応募して、それなりに大きな事務所の合格を勝ち取った）、もともと目指してい

た医学部の道だったり、多岐に亘るものだった。しかし、どれもなんとなくではあったけれど腑に落ちるものでなかった。なぜかは分からないけれどもっと自然な形で、パズルの最後のひと欠片を埋めるみたいに分かりやすい形で、僕の道が見えるような気がしたのだ。

そして、僕が文学部に進みたい、と考えたのはやはりふとした自然な成り行きだった。

昼まで寝てしまって、もう日が高く上ってしまった時分に、僕は本を読もうと近くのカフェまで自転車を走らせていた。春風が心地よく僕の頬を撫でた。本当に心地の良い春風だった。自転車のペダルを踏みながら、僕はどうしてか芥川龍之介の作品「蜃気楼」を思い浮かべた。記憶というのは不思議なもので、「蜃気楼」は夏の話だから間違いなく直接的には春風など出てこないのに、僕の中で小説を読んだ際に心象に浮かんだ景色と今見てい、感じている世界とが繋がったのだった。僕は感動した。これまでにそういう経験が無かったわけではないが、自らの先の見えない状態も相まってか、とても感動したのだ。

そして、なんの違和もなく、その発想は浮かび上がってきた。

僕は、文学を学ぶんだ。

そのようにして僕は文学部に進むことを選び、そして神戸大学に入った。

合格を知って、母は言った。

「おめでとう。あなたはもう二十二なんだから、しっかり大学の四年間で何をするのか、何を成し遂げるのか、決めなさい」

それは、母に言われるまでもなく決まっていた。僕は一つの軸となる目標を定めてい、副次的な目標をいくつか決めていた。

主なる目標は、僕が作家となってものを書くこと、文学部の人間の中ではありふれた志しだろうけれど。僕は小説の世界で、人間らしさ、人間くささを描きたいのだ。知らない誰かの心を動かしたり、ふとした折に僕の文章が思い出されたりしてほしい。そして何より、僕の小説が誰かにとって、嵐の中の洞穴みたいに、ひと時の安息地になってほしい。

たとえその目標が叶わずとも、それに向けて自らの持てるすべてを捧げると強く心に決めて、僕は文学部の道を選んだのだ。

多くの人間が作家を志すけれど、それを実際に成し遂げられる人間はほとんどいない、ほんの一握りだ。だから、僕は副次的な目標を定めた。

まず、大学で様々な経験を——それは一見文学に関わらないように思えたとしても——積むこと。

かつて別の大学にいた時、僕は単位取得に必要なものだけを着実に受講していた。教養科目にしても、いわゆる楽単と呼ばれるものを。それを改めることにした。

今、僕は芸術学、哲学、文学、体育、数学など本当に多岐に亘る学問を受講している。そして、そのすべてが自らの滋養となっていることを感じている。例を挙げれば枚挙に暇がないけれど、芸術学ではそもそも芸術とは、芸術作品とは何であるかについて深く考えること、哲学においては幸福とはなにか、他者とはなにかなどという根源的な問い、数学ではその思考の方法そのものの新しさ、という風にして。

以前の大学では所属していなかったサークルにも、所属することにした。僕は演劇サークルを選んだ、それは極度の恥ずかしがり屋の僕には驚くべき選択。なんとか自分の殻を破って、表現することそのものを追求したいと考えてのことだ。

次に、これまで以上にたくさんの本を読むこと。これまでは大正から昭和中期くらいまでの日本の純文学ばかり読んでいたけれど、もっと幅広く読もうと決めたのだ。ガブリエル・ガル

シア＝マルケスなどの海外作家や、近年の日本人作家の作品を試してみたが、国や時代、考え方の違いや新しさが感じられてとても興味深く読んだ。文章の書き方から、登場人物のものの考え方まで、すべてが新鮮でこれまでの自らの視野の狭かったことがよく分かった。

視野の広がり、それはそのままに僕の世界の広がりだった。まるで、初めて眼鏡を掛けたときみたいに世界が広く、明晰になってゆく。

そして、最後が最も大切で、大学生という限られた時間を活かし、生きるという体験を存分に楽しむこと。

僕には、もう一度大学に入り直したからこそ分かることがある。いかに大学生という期間が恵まれてい、多大な可能性を秘めた期間であるかだ。皆が当然知っているように思っているけれど、実は知らないことだ。その道の専門家が講義を行い、僕たちは知識を吸収する。図書館には先人たちの知恵が堆く積まれている。多くの多様な人間が集まっている。そんな場所で過ごせるのは限りなく幸せなことなのだ。

生きるという体験を存分に楽しむこと。僕は神戸大学に入り、ほんとうに素晴らしい友人に出会った。ぜひとも、その友人の言葉を借りたい。

「人生は壮大な暇つぶしだと思っていて、いつ中断されてもいいように生きようと思ってる」

彼女の言葉は、僕の中の霧を一気に晴らしてくれた。幼い頃からあった、薄いけれど消えることのなかった霧を。暇つぶしとは決して無駄だということではなく、人生は楽しむに値するものなのだ。

このような経験が、僕のものを書くという志しを一層強くするのは言うまでもない。そして、こういった友人や彼らの言葉が僕の書くものを深く、人の心を動かすものにしてくれるだろうと信じている。

様々な学問や大学での活動、読書、友人、そして生きるという壮大な体験。これらすべてが僕の世界を広げ、視界を明瞭にし、そうやって僕は作家になろうとするのである。

文学を学ぶとは、これもまた人生と同じく壮大な暇つぶしだと思う。これまでも、これからも書くという人間の行為は終わることがないだろう。それと同じように、それを読む行為も学ぶ行為も終わることを知らないはずだ。しかし、そうであるからこそ、僕はいつ中断されてもいいように文学を学びたい。限られた時間を大切にし、存分に楽しみながら文学を学びたい。

先に述べた友人と話していた時、「あなたの目っていい輝きをしてると思うよ」と、彼女は言った。僕にしっかりと伝えようと、和やかながら真剣な面持ちで。

どうやら、僕は目の輝きを取り戻したようだ。無論、僕自身には分からないことだけれど。しかし今、僕の中に迷いはないように思える。

文学を学び、ものを書く。これが僕のほんとうに望んでいた道なのだ。そのようにして、僕は人生を生きる。壮大な暇つぶしを行う。

僕は大学という恵まれた環境と、無条件に僕を支えてくれる両親と弟、素晴らしい友人と、そのすべてに深い感謝を抱いて、文学を学ぶ。

そう、僕は文学を学ぶんだ。

新人賞

会話の先にあるまだ見ぬ世界

藤原（ふじわら）　帆夏（ほのか）（文学部 1 回生）

「祭りの手伝い、してみない？」

ある日、母から一通の LINE が来た。2026 年 4 月、晴れて神戸大学に入学した私は、下宿を始めて目まぐるしい生活環境の変化に追われていた。そんな中、母との連絡手段は主に LINE で、たまに他愛のない話をしたり、生活関連の連絡をしたりするくらいだった。そんなある日、そのお誘いは突然にやってきた。聞くと、私の通っていた小学校の夏祭りを今年は PTA として母も出店するらしく、その店の手伝いをしないか、ということだった。今回売るのはフランクフルトとジュースで、夏場であるため特に体力と人手が重要であるのだ。

「やりたい！」

私はやや乗り気でそう返信した。飲食店バイト等の経験はなかったものの二つ返事で引き受けたのは、ただ単に面白そうだったからというだけではない。実は、私は高校の頃に有志参加の東日本大震災復興ボランティアに参加したり、ネパールへのボランティアツアーに参加したりするほどホスピタリティを感じられる活動に興味があり、そこから生まれる出会いもかけがえのないものとしてものすごく重視している。もちろん、大学でもボランティアサークルに所属して、楽しく活動に励んでいる。そんな中でのあまりにも魅力的な誘いを、断るわけもなかったのだ。

時は過ぎ、だんだんと夏祭りの日が近づいて来る。母との LINE でも話は進んでおり、私の他に助っ人がもう数人、それぞれ今回母と一緒に出店する PTA の方々の子供で、かつて私の小学校の同級生だった人もいるということだ。私は楽しさを感じていた半面、実は少し億劫にも感じていた。関わりがあったのは何年も前のことで今は全く別の人生を生きている人たちであるし、逆に昔少し関わりがあった思い出があることで全く割り切って接するのも難しいと感じたからだ。そんなこんなで楽しみと興味、少しの不安を抱えつつ、当日を迎えたのだ。

当日は気持ちがよいほどの快晴で、降りかかる蝉の声が夏を精一杯に感じさせる。13 時に出発して電車を乗り継いで約 1 時間、私は約 18 年を過ごした思い出の故郷に帰ってきたのだ。少し早めの到着だったため小学校を見て回っていると、外観はほとんど変わっていなかったが、エレベーターの設置や階段の段差をなくすなどのバリアフリー化が施されており、すべてがあの頃のままではなく、時代とともに成長している小学校に懐かしさ以上の時代の流れと親近感をしみじみと感じた。

15 時になった。準備開始だ。母や他の PTA の方たちと顔合わせ・挨拶をしたのちにテント設営や机の配置など、着々と進んでいく。私も役に立てるように負けじと働いた。また、どうやら助っ人ととして募集のかかった若手要員は私が一番乗りだったみたいで、準備が進みつつあるころにぽつぽつと登場しだした。こうして私はかつての同級生と再会を果たしたのだ。

初めは別々に作業をして、特に話すこともなかったが、やはり同じ小学校で 6 年間育ってきたのだ、顔見知りということもあって話し始めたらすぐに打ち解けることができた。自然と大学やサークル、今の生活の話になる。そこには、想像の範疇を超えた個々の人生があった。一人は中学受験をして地元を離れ大学まで進学し、将来の夢を見つけて具体的に考え出しているそ

うだ。もう一方で、家を継ぐために頑張っている人もいた。その人は、兄弟構成的に自分がそういう立場だから、とかそういうものだから、とかではなくふと将来のことについて考えたときに職業は家を継いで、家業を存続させていきたいと自分からはっきりとした意志を持って望んでいるのだ、と話していて、ものすごく立派だと思った。当たり前だが、同郷で育ち、知り合ったといっても他人は他人。別の考えがあり、家庭環境も異なり、まったく別の世界を生きているのだ。私にはそういう風な具体的で大きい将来の夢はなく、大学生活を通して見付けて行けたら良いなと思い入学したのだが、文学部を選んだ理由ははっきりとある。それは、二年生から分かれる専修で心理学を専攻したいと思ったからだ。国際人間科学部とはまた異なった、学問としての実験を伴った心理学。まさに私の好奇心の矢印の先が、ここに真っすぐと向いているのだ。受験期に様々な大学を調べて、どこもあまりピンとこずに、それでも調べた末に見つけた、心理学専修。その時からずっと神戸大学文学部人文学科心理学専修を目指して今まで日々努力をしている。そして、そんな私が18年を通して気付いたことがある。それは、人と話しているだけで充分心理学に触れている、ということだ。ただ単に数字や理論のみで人を理解するのではなく、もちろん学術的な知識は必要だが、その知識が生きるのは実際に人と向き合う経験があってこそではないだろうか。自分と違う価値観・考えの人やそれに伴う行動。なぜそう思い、その場面でそんな行動を起こしたのか。なぜそれをしたいと思ったのか。話を聞いて自分には理解できないことも珍しくはないが、それもひっくるめてものすごく興味深いと思えるのだ。だから私は他人との会話を大切に思っているし、できれば一生涯でできるだけたくさんの人と出会い、話をしてみたいと思う。そして、そう考えると私にとってあの日の夏祭りでの時間は、単なる地域の手伝いをした日ではなかったのだ。久しぶりに会い、ほとんど初対面かのような感覚に戻っているにもかかわらず、自分の夢や価値観・人生経験を話してくれた人たちとの会話は、一つ一つが私にとって新鮮で、私に新しい世界を見せてくれた。人は本当にそれぞれ異なる考え方や人生を歩んでいて、その違いに触れるたびに「もっと知りたい」という気持ちが大きくなってゆく。その意味で、心理学への熱を再確認させてくれたひと時でもあったのだ。

結果的に夏祭りは大成功した。開始直後から人が途切れることなく、フランクフルトを楽しみにしてくれている小学生の様子や、小さいながらに小銭を握りしめてジュースを買いに来てくれる子供たち。周りを見渡すともちろん他にも出店があり、どこのブースでも繁盛を見せていて、校庭には夏祭りらしい賑わいが漂っていた。用意していたフランクフルト1200本は完売し、ジュースも売れ行きが良く、気持ちよく店を閉めることができた。最後には花火も上がり、夜の校庭で遊ぶ小中学生を横目に、昔の自分と重ね合わせて青春を感じていた。あの頃はまだ想像もつかなかった進路を選択し、それをつかみ取るために努力もしてきた。進路だけではない。今回の手伝いの参加のような小さな出来事も「私」を形作ってゆく。一つ一つは些細な選択に見えても、その積み重ねが新たな出会いを生み、自分でも気づいていなかった価値観や興味を教えてくれ、私の人生を彩っていく。そしてそれらは少しずつ私に影響を与え、成長させてくれる。母からの何気ない一本のLINEが、自分自身を見つめなおす機会をくれるものとなったのだ。

神戸大学で心理学を学びたいという目標はもちろん変わらない。しかし、それ以上に私は大学という場所で出会う人々との何気ない会話や経験もまた、自分にとって大きな学びになるの

ではないかと考えている。人と関わることを大切にしながら、知識だけでは得ることができない、「人」をこれからも学び続けていきたい。あの日の夏祭りは、そのことを改めて教えてくれた一日だった。

「ねえねえ、」

私は話す。友達と、家族と、時に道ですれ違ったような名前も知らない誰かと。「人」について学び、理解し、好奇心のままに、自分のまだ見ぬ新しい世界に触れるために。

学生レポートコンクール入賞作品［講評］

優秀賞「海の見える坂で」　光野 麦穂（英米文学 4回生）

時間に追われる毎日を送っていた作者は、イタリアへの留学で初めて「立ち止まり、考える時間」を持った。そして就活の際、何をやりたいか、大切にしたいかを幾度も自問し、働きたい会社に出会えた。

「文学部の良いところは、無限大の選択肢を選び取るための思考を助け、表現力が身につけられる」という作者の言葉、社会に出て様々な困難に出会った時に生かしてほしい。

佳　作「教養でつながる」　清水 さやか（フランス文学 4回生）

1年で書いたエッセイの結びは、「教養を身に着け、それを通して良い人間関係を作り、豊かな大学生活を送りたい」。

部活や留学などを経験し、教養を通じて豊かな大学生活が実現されていると作者は実感する。しかし、「語りえぬもの、核心に触れるような話題をさける時に教養を用いる」とあるが、教養とはそんな容易なツールなのだろうかと、疑問が湧いた。

新人賞「文学を、学ぶ」　工藤 陸（1回生）

工学部で学んでいた時にかけられた母の言葉がきっかけとなり、一年間休学、自分の本当にやりたいことを考えた。ある瞬間浮かび上がった「文学」を迷いなく選択した。目標は作家となること。効率や功利性を重視するグローバル化の中、人々の心はより閉鎖的になる。そんな世界で、文学の果たす役割は大きいと感じる

新人賞「会話の先にあるまだ見ぬ世界」　藤原 帆夏（1回生）

母の誘いで参加した小学校の夏祭りのサポートで、久しぶりに昔の同級生たちに出会った。そこでの会話から、自分の「心理学への熱」を再確認した。人と触れあい、様々な体験をして、心理学を深く学んでほしい。

選考を終えて

受賞されなかった方を含め、人文学を学ぶ意義や心の有り様につき深く考えた作品が占めていました。自分を見つめることは非常に意味深いことですが、より幅広いテーマの作品にも出会えることを期待しています。

（文責　審査委員長　西川京子）

2027年の第21回 文窓賞学生レポートコンクールへの
作品応募を心待ちにしております。　　文窓会一同

発 行

2026年10月30日
神戸大学文学部同窓会
文窓会
https://www.bunsokai.com/（ 文窓会）
http://www.lit.kobe-u.ac.jp/（神戸大学文学部）